

# Lower prevalence of Entamoeba species in children with vertically transmitted HIV infection in Western Kenya

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/45610">http://hdl.handle.net/2297/45610</a>


This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.




## 論文内容の要旨及び審査結果の要旨

受付番号 医薬保博乙第 26 号 氏名 Matey Elizabeth Jemaiyo (主任教員 市村 宏教授)

論文審査担当者 主査 中村 裕之 印 

副査 西條 清史 印 

藤永 由佳子 印 

### 学位請求論文

題 名 Lower prevalence of *Entamoeba* species in children with vertically transmitted HIV infection in Western Kenya  
『ケニア西部の HIV 母子感染児では非感染児に比べアメーバ属感染率が低い』  
掲載雑誌名 AIDS 平成 28 年 掲載予定

ヒトに感染する 6 種の赤痢アメーバ (*Entamoeba species*) の中で、*Entamoeba histolytica* (赤痢アメーバ) だけがヒトに病気 (大腸炎や下痢症などの腸疾患や肝臓、肺、脳などの膿瘍) を起こし、残りの 5 種 (*E. dispar*, *E. moshkovskii*, *E. coli*, *E. hartmanni*, *E. poecki*) は病原性を持たない (片利共生生物)。ヒト免疫不全ウイルス (HIV) に感染している男性同性愛者 (MSM) 間で赤痢アメーバ感染が高頻度にみられるが、HIV 感染が赤痢アメーバ感染のリスク因子かどうかについては明らかになっていない。また、非病原性赤痢アメーバ種の感染に関してはほとんど注目されてこなかった。本研究では、交絡因子としての MSM の影響を避けるため、ケニアの HIV 母子感染児 (123 名、5-15 歳) と HIV 非感染児 (111 名、5-15 歳) を対象とした。*E. histolytica* と他の非病原性赤痢アメーバ種の感染率を分子疫学的手法により検討し、赤痢アメーバ種感染が HIV 感染の指標となり得るかどうか評価した。

その結果は以下のようにまとめられる。

- (1) *Entamoeba histolytica* 感染率は 0.4% (1/234) であった。
- (2) 赤痢アメーバ種感染率は HIV 感染児で HIV 非感染児に比べ有意に低かった (29.3% vs. 55.0%,  $P < 0.001$ )。HIV 感染児で HIV 非感染児において、*E. histolytica* 感染率は 0%/0.9%、*E. dispar* は 3.3%/5.4%、*E. coli* は 26.8%/51.4% ( $P < 0.001$ )、*E. hartmanni* は 14.6%/27.9% ( $P = 0.016$ )、*E. moshkovskii* は 0%/0% であった。
- (3) 赤痢アメーバ種の重複感染率が HIV 感染児で HIV 非感染児に比べ有意に低かった (13.0% vs. 27.9%,  $P = 0.005$ )。また、HIV 感染児において、赤痢アメーバ種に重複感染している児の CD4 陽性 T 細胞数 ( $1261/\mu\text{l}$ ) が赤痢アメーバ非感染児 ( $918/\mu\text{l}$ )、単種感染児 ( $787/\mu\text{l}$ ) に比べ有意に高値であった (両方とも  $P = 0.03$ )。

以上の結果から、HIV 感染は赤痢アメーバ種感染のリスク因子ではないこと、また、赤痢アメーバ重複感染はより良い免疫状態の指標となり得ることが示唆された。本研究は、ケニアで初めて分子疫学的手法を用いて赤痢アメーバ種の感染リスクを明らかにしたものであり、学位授与に値すると判断された。